

“鎌倉楽しむ会”

鎌倉・常立寺などの散歩

- ◆ 集合場所：江ノ電 藤沢駅 改札口
 - ◆ 開催日：2025年4月19日（土）
 - ◆ 集合時間：10時30分
 - ◆ 解散時間：14時30分頃予定／江ノ電江の島駅
 - ◆ 参加費：500円（交通費・飲食代・拝顔入場料などは自己負担）
 - ◆ 散歩コース
- 1、寛文 庚申塔 2、糸のし満道標 3、西行もどり松 4、密蔵寺
 - 5、本蓮寺 6、常立寺 ≪腰越駅・ランチ≫ 7、小動神社
 - 8、浄泉寺 9、満福寺 10、龍ノ口刑場跡 11、龍口寺（解散）

「寛文 庚申供養塔」



庚申信仰は、十干十二支によって、六十日に一度めぐってくる「庚申」の日に、その夜は眠らず「無病息災・大願長寿」などを願う信仰で、中国の道鏡の教えである。平安時代は朝廷の行事であったが、時代が下って江戸時代の万治・寛文頃(1658-72)には、庶民にもこの信仰は広がっていた。

その源流は、体内にいる三尺(さんし)の虫が、庚申の夜、天帝にその人の日常の罪科が告げられ、命が縮められるという。そのため講中の人々が、当番の家で眠らず酒食歓談して朝を迎えるという都合のいい話となっている。

「糸能し満(江の島)道」の道標

この道標は「江の島弁財天」を篤く信仰していた「杉山和一検校(1610-94)」が、江島神社への参詣者のために東海道藤沢宿からの「江の島道」に四十八基を寄進したものである。杉山検校は、伊勢藤堂藩士の子として生まれたが、幼くして失明。鍼術を学び、成人し江島弁財天に参詣して、管を用いる管鍼術を考案した。寛文十年(1670)検校(盲人に与えられる最高位)となり、五代將軍徳川綱吉公に鍼治療を行い、將軍家御用医師となった。

現在は、江戸隅田の堅川に拝領した土地に「江島杉山神社」を建立し、江の島の奥宮を模した造り方も附随した神社にお祀りされています。

「 西行もどり松 」



鎌倉時代の末期、源平合戦の時、平重衡による南都焼打ちにより、東大寺の大伽藍も焼失してしまった。朝廷は、その再建の任を「重源僧正」に依頼したのであった。重源は数々の協力者と庶民の浄財を求めて全国に勧進を行った。協力者の1人に「西行法師」も立ち上がり、当時の奥州藤原王国の「藤原秀衡」への浄財要請に向かう途次、鎌倉に立ち寄り「源頼朝」とも会っている。

物語は、西行法師が、この枝葉の見事な松の木を見て、都が恋しくなり、思はず都の方を振り返り枝を西方にねじり向けたため松も幹の途中から西方に曲がってしまったという。

また、説明板の後半には別の西行伝説も記されている。そして、松の近くには、杉山検校寄進の「西行のもどり松」と刻まれた江ノ島道の名所案内道標が建っている。

「 史跡一遍上人地蔵堂跡 」



弘安五年(1282)三月一日、遊行廻国中の一遍上人が巨福呂坂から、鎌倉に入ろうとしたところ「北条時宗」の供の武士に阻止された。その夜、一遍上人の一行は、やむなく野宿を決めた。この時、鎌倉中の一遍上人を慕う者達が食物を運んで供したという。

この法難霊場の地に立てられたお寺は、現在の鎌倉・山ノ内のクルス紋のある「光照寺」といわれています。

一遍上人の一行は、三月七日には片瀬の浜の地藏堂に移り、七月半ばまで布教し、大勢の帰依する俗衆が訪れ、紫雲が沸き上がるなどの奇瑞があらわれ、花が降り始めたという奇瑞も続いたという。

その場所は、この「地藏堂跡」の標識が立っている所であったと伝えられている。

「 密蔵寺 」



開山は徳治元年(1306)の鎌倉時代後期に「有弁」という僧が建立した。一時衰退したが、天正五年(1577)に「祐与上人」により中興され、本尊は薬師如来と伝えられる。本堂には「愛染明王」も安置され、境内には「愛染かつら」の木がある。

この「桂の木」は戦前の有名な女優「小暮実千代」が、当時ヒットした「愛染かつら」の映画に出演し、密蔵寺と縁ができ、昭和三十年(1955)四月、同寺の本堂修復の祝賀行事に招かれた時に植樹されたということです

「 本蓮寺 」



現在は日蓮宗寺院となっているが、創建の歴史は古く、もともとは密教寺院で、飛鳥時代の推古天皇三年(595)に建立されたと伝わる。それが推測ですが、弘法大師が東国布教の折(平安時代西暦八百年後半)、真言宗密教寺院となったと思われる。

元暦年中(1184-85)には、源頼朝が再建したという。文覚上人に命じ、江の島に「弁財 天」を勧請させ、寿永元年(1182)には密かに奥州の「藤原秀衡」の調伏祈願を行っていた。

その調伏祈願に参列する頼朝が、この寺の門前の松に馬を繋ぎ休息した。その故事に因み「鎌倉殿 駒繋ぎの松」と標示されている。

文永八年(1271)九月に日蓮聖人が止宿したといわれ、それにちなんで嘉元二年(1304)日秀上人が日蓮宗に改宗、中興再建されたと伝わる。長い参道の奥には、薬医門、・本堂・鐘楼・多宝塔などが整っている。

また、境内には鎌倉幕府第六代将軍「宗尊親王」の歌碑があり、「帰り来て又見ん事も固瀬川濁れる水のすまぬ世なれば」と刻まれている。

宗尊親王は後嵯峨天皇を父として、建長四年(1252)、五代執権北条時頼に招かれ、鎌倉に下り、鎌倉幕府六代将軍に就任した。鎌倉幕府念願の「皇族将軍」であった。

「 常立寺(じょうりゅうじ) 」



開山は「日豪」で、室町時代の永正年間(1504-21)といわれる。もとは真言宗の回向院利生寺という名であったが、日蓮宗に改宗した。

文永五年(1268)モンゴル(元・ゲン)皇帝フビライから通交を求める国書を届ける使者が、朝廷と鎌倉幕府に派遣されてきた。その後も、たびたび使者が来日したが、これの返書へは無視し続けた。

文永十一(1274)十月、いよいよ元・高麗軍が来襲し対馬・壱岐両島を侵略し九州本土を狙ったが、夜には暴風雨になり、多くの軍船は沈没し、早々と撤退していった。

元のフビライ皇帝は、建治元年(1275)四月、日本の朝貢と服属勧告の国書を持参した「杜世忠(とせいちゅう)」等、五人の使者を派遣してきた。朝廷はその判断を鎌倉幕府に委ねたが、八代執権・北条時宗は、断固たる決意をもって、龍ノ口で斬首してしまう。

その杜世忠ら元の使者五人は、当寺に葬られ、「元使塚」と伝えられる五基の五輪塔が建てられている。処刑から六百五十年後の大正十四年(1925)新たな「元使塚」の供養塔が建てられている。

また、元横綱・朝青龍などもお詣りし、モンゴルの英雄の印の青い布が巻かれている。

「 浄泉寺 」

開山は弘法大師と伝えられるが、創健の年次や縁起は詳らかではない。弘治四年(1558)に没した元秀僧正が中興開山となっている。本堂は未公開ですが、本尊は左手に剣を持ち体の正面で腕を交差させている尊像で「左剣不動明王」と呼ばれている。

また、明治新政府の発布した「神仏判然令」で廃寺に追い込まれる多くの寺院の中では珍しく、大正六年(1917)七月まで、小動神社の別当を務めていた。見方によっては非常に「運」の強いお寺と思われる。

「 小動(こゆるぎ)神社」



平治の乱(1159)から逃れてきた佐々木四兄弟は、源頼朝が平家打倒に立ち上がった時、次男「経高」は源平合戦の一番矢を放ち、四男「高綱」は宇治川合戦の一番乗りで歴史に名が残る大活躍するのです。三男佐々木三郎盛綱は、源範頼軍に参加し壇ノ浦では大活躍し鎌倉幕府創立に貢献します。

その「盛綱」が文治年間(1185-90)、江の島弁財天参詣の途中、小動崎に立ち寄り、その風光と風もないのに枝葉が静かに揺れ、琴の奏でる妙音が聞こえる「小動の松」に魅せられ、往時の領地・近江国から「八王子宮」を勧請したものという。そして、「八王子宮」として、腰越の鎮守として鎮座した。

明治となり、新政府の「神仏判然令」により明治四十二年(1909)近隣の諏訪神社を合祀して「小動神社」の神社名となった。

現代版の事件としては、太宰治が昭和五年(1930)十一月、この岬で心中事件を起こし、自身は漁船に助けられるが、相手の女性は水死してしまう。後年太宰はこの事件を題材にした「道化の華」を起稿している。

「満福寺」



寺伝では、開山は「行基大僧正」で、天平十六年(744)創建と伝わる古刹であります。承安三年(1173)に没した「高範僧正」が中興開山したと伝わる。本尊は、室町時代作と言われる「木造薬師如来立像」です。

このお寺を一躍後世までも有名にしたのは「腰越状」の一件であります。物語は義経です。

源義経は、文治元年(1185)三月、平氏一門を壇ノ浦の合戦に於いて平家一門を壊滅に追い込み、意気揚々と都へ凱旋すると、朝廷の「後白河法皇」への拝謁が受けられ、さらに京都守護の官位「検非違使」を授与されるように大歓迎を受けることとなります。

そして、絶世の美女と讃えられる「静御前」をも得て、この一瞬の時が、義経！最高の幸せの時ではなかったのではなかろうか。都での祝賀や戦後処理を終え、次には「鎌倉殿・頼朝」への凱旋報告のため、捕虜とした平家の総大将「平宗盛」父子を引き連れ、鎌倉へと下るのでした。

義経一行は、鎌倉の極楽寺口より大歓迎の凱旋と思いきや、待機していた「北条時政」に近く「満福寺」で待機するよう言われ、「平宗盛」父子だけを連れて行ってしまった。義経本人の鎌倉入りは拒否続けられた。

この拒否行為に義経は、政所別当・大江広元を「鎌倉殿」への取次として嘆願状を提出するので。この書状が後世に有名になる「腰越状」なのです。

しかし、これをもってしても「鎌倉殿」の勘気は解けず、面通しの終えた「平宗盛」父子を引き連れ「恨みの塊」となって京へ帰っていくのです。

津・腰越の鎮守で、御祭神は「玉依比売命(たまよりひめのみこと)」ですが、ここの社地は藤沢市片瀬にある鎌倉市津の飛び地に属するため、氏子の要望で昭和五十三年(1978)に鎌倉市腰越1548-4の地に新社殿を建立し遷座された。

龍口明神社の縁起が面白いので、少し書いてみましょう。

昔、深沢の湖水に、五つの頭を持つ龍が住んで暴れ、人々を苦しめていた。欽明天皇十三年(552)の四月頃、暗雲覆い台地が振動するうちに、雲上から天女が現れ、海中からは波をかき分け島が出現し、天女がその島に降りてきた。五頭龍は、この天女的美しさに見とれて、天女へと求婚した。

天女は悪さをすることは許しがたいことだと、その求婚を断る。五頭龍は、天女の教えに従い、これからは世に害毒を及ぼすことはしないと誓ったので、天女はそれを受け入れ夫婦になったという。天女は「弁財天」であり、海中からの出現した島は「江の島」ということに伝わっています。そして龍口明神社は、この五頭龍が祭神として祀られたということです。このような伝説から「江島神社」と「龍口明神社」は夫婦(めおと)神社ともされているという。

また、龍が誓いを立てた時、南を向いて「山」と化した。それが龍口山であるといい、龍口寺背後の山並みを龍の姿に似せて、龍ノ口(たつのくち)は、その「口」とみなされたことから、それが「地名」となったといわれている。

「 龍口刑場跡 」



「 龍口刑場跡 」の説明

この龍ノ口の地は、その歴史は古く、源頼朝が石橋山で平家打倒の旗揚げをしたときに敵対した「大場景親」が頼朝を追い詰めるが、逆襲され、治承四年(1180)十月、この地で処刑された。

文治五年(1189)六月には、奥州藤原泰衡に攻められ自刃した「源義経」の首が、奥州から「黒漆(こくしつ)の櫃(ひつ)に、美酒に浸され」首実検のため運ばれてきた。首実検には、和田義盛と梶原景時が立ち合い、検分の後には片瀬の浜に棄て流されたという。

また、建暦三年(1213)五月、今度は北条義時に敗れた「和田一族」の首が梟(さら)されたという。この刑場の名が広まったのは、なんといっても、日蓮上人の龍ノ口法難である。

文永八年(1271)九月、日蓮上人は松葉ヶ谷の草庵を急襲され、幕府評定所に連行され、佐渡島への遠流が判決された。しかし、流罪の裏には連行の途中で梟首することが決まっていた。

日蓮上人の護送一行が龍ノ口刑場に子の刻(真夜中零時)に着き、日蓮上人を馬から下し、斬首の刑を執行しようとした時、俄かに、江の島方面から、大きな光る月のような鞠(まり)が辰巳(東南)から戌亥(西北)にかけて輝き飛んでいった。斬首しようとした武士は目がくらみ倒れ、その刀も折れてしまったという。この事件により日蓮上人は斬首を免れ流罪となったのです。

その後の記録は、前述した元の使者杜世忠ら五人を建治元年(1275)四月、斬首したこととなっている。

「 龍口寺 」 ①



建武四年(1337)、日法上人が、日蓮聖人法難跡の地に自作の祖師日蓮聖人像と斬首されようとした時の「敷皮石」を安置し一字を建立したのが「龍口寺」の始まりとされている。その後、鎌倉・津村の島村采女からの土地の寄進を受け、慶長六年(1601)日尊上人が一寺として創建した。

本堂は天保三年(1832)檜造銅板葺きの間口十二間奥行十五間の大きな伽藍として建立された。中央には、創立者の日法上人の自作の日蓮聖人像を安置し、脇陣に日蓮宗の六老僧(日昭・日朗・日興・日向・日頂・日持の高弟六人)の木像ら諸仏像。また、清正公の木像(加藤清正を日蓮宗の守護神として祀る)も安置されている。

また、日蓮聖人が龍ノ口刑場で斬首されようとした時座った石の上に皮が敷かれたので、「敷皮石」と言われ、それが「霊宝」大切に安置されている。

「 龍口寺 」 ②



日蓮聖人が処刑のとき入れられた「土牢」が日蓮聖人の銅像が安置され「御霊窟」となっている。

そして、右手には「鐘楼堂」があるが、昭和四十五年(1970)、龍ノ口法難七百年を記念して「中山法華経寺」(千葉県市川市中山)から移築されたという。

また、大書院は、昭和初期信州松代の養蚕御殿(旧松代藩邸)を移築したものという。

立派な五重塔は、明治四十三年(1910)竣功した神奈川県唯一の木像五重塔となっています。



ランチの場所: 予定
腰越海岸
「池田丸」



完